

## コレクション展『メモリー／メモリアル 65年目の夏に』

2010年7月19日(月・祝)-11月7日(日)

コレクション展2「メモリー／メモリアルー65年目の夏にー」は、被爆から65年目を迎え、ヒロシマの記憶(＝メモリー)が美術を通じてどのように描かれ、表されてきたか、そして時間と共に変わっていく記憶をいかに記し、出来事を伝えるもの(＝メモリアル)として形に残してきたか、様々な世代の美術家たちの作品を紹介します。

広島は世界最初の被爆地として深い喪失を経験しました。広島市現代美術館は広島の歴史、街の移り変わり、ヒロシマの記憶についてアーティストが取り組んできた作品を、コレクションの大きな軸として収蔵しています。そこにはアーティストたちの感性がどのように「ヒロシマ」を受け止め、未来に伝えていこうとしているのか、様々な試みと問いかけを見ることができます。

本展は3つの視点から構成されています。

原爆の記憶を描いた<1945年、夏の記憶と記録>、ドーム、太田川といった広島の街、風景を表象するモチーフを通じた表現を取り上げる<広島の街、風景の記憶と描写>、可視化できない記憶や時間の流れを視覚化し伝えようとする試み<ヒロシマのためのメモリアル>。

それは65年の間ヒロシマに向かい続けてきた、様々なアーティストによるヒロシマに対する探求の一回答といえます。

また本展の特別企画として、ポーランドのポズナンで開催される「メディエーションズ・ビエンナーレ」と連携し、小林正人(1957年生まれ、広島県福山市在住)の作品2点を展示します。

小林は昨年から2組1点の「ペア絵画作品」を制作しています。離れてなお惹かれ合い、お互いを関係づけながら存在するペア絵画は、時空を超える距離＝愛を表現しています。小林のペア絵画の片割れは「メディエーションズ・ビエンナーレ」において、ポズナン国立美術館、かつてのヒトラーの執務室が残るZamek文化センターの2カ所に展示され、もう一方を当館本展において展示します。

ポーランドという、列国の干渉を受け国が分割されてきた歴史を持つ国は、原爆ドームと同じく人類の負の世界遺産(アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所)を持つ国でもあり、遠く離れながら、痛みと喪失を共に経験したポーランドと広島に展示されるペア作品は、人からしか生み出せない愛情、創造力の豊かさ、未来について語るものでもあり、65年目の夏に広島から発信するひとつのメッセージともなります。

- 【会期】 2010年7月19日(月・祝)～11月7日(日)  
【会場】 広島市現代美術館(広島県広島市南区比治山公園1-1)  
【開館時間】 午前10時-午後5時  
※11月3日は午後7時まで開館 ※入館は閉館の30分前まで  
【休館日】 月曜日(祝休日にあたる場合開館し、翌平日休館)  
【観覧料】 一般360(280)円、大学生270(210)円、高校生170(130)円  
※()内は前売りおよび30人以上の団体料金  
※11月3日は全館無料開放  
【主催】 広島市現代美術館

1945年、夏の記憶と記録

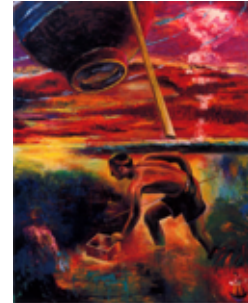
菊畑茂久馬、工藤哲己、西雅秋、丸木位里・俊、横尾忠則ほか



丸木位里・俊《原爆ーヒロシマの図》1973



西雅秋《セブン・キャスツ・ヒロシマ 1995〜》1995



横尾忠則《1945年、夏》1996

広島市の街、風景の記憶と描写

小沢剛、金光松美、佐藤時啓、土田ヒロミ、利根山光人、奈良美智、野見山暁治、細江英公、堀浩哉、松谷武判、宮崎進、宮本隆司、村上隆、蔡國強ほか



小沢剛《ベジタブル・ウェポン・スペシャルー牡蠣の水炊き鍋、とろとろ湯豆腐、美酒鍋／広島》2005



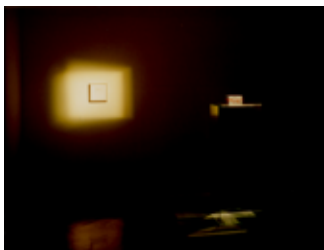
土田ヒロミ《「ヒロシマ・モニュメント」シリーズより ドーム》1979/2008



村上隆《地球戦隊エコレンジャー》2005

ヒロシマのためのメモリアル

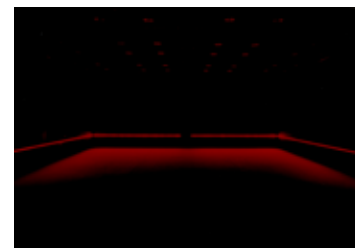
榎倉康二、オノヨーコ、河原温、草間彌生、宮島達男ほか



オノヨーコ《HAKO》1995



草間彌生《よみがえる魂》1995



宮島達男《Death of Time》1998

特別企画 小林正人作品展示



小林正人《この星へ》2009



小林正人《星のモデル #5-2》2010

広島市現代美術館（学芸担当：神谷 広報担当：後藤、鈴木）  
〒732-0815 広島県広島市南区比治山公園 1-1  
TEL/ 082-264-1121(掲載用)・082-264-1146(問い合わせ用・学芸直通)  
FAX/ 082-264-1198  
E-MAIL/ hcmca@hcmca.cf.city.hiroshima.jp